報告別講評

A. 研究部門・報告Ⅰ

寺内　一

マクロルールの階層性に基づく英文読解問題の提案：詳細情報理解から概要把握まで

【研究者：佐藤 連理】

本研究は，概要把握課題を遂行するときのマクロルール（削除，一般化，構成）に注目し，既存の読解問題の分析した上で，詳細情報から概要把握まで問うことが可能な多肢選択式問題を開発することを目的としている。まず，英検では削除により解答する問題が多いものの，級が上がるにつれ，より高度な処理が必要となる一般化と構成を含む設問が増えることを明らかにした。次に，マクロルールのすべてを含む多肢選択式問題を開発し，要約問題との代替可能性を検証している。結果より，多肢選択式問題でも概要把握能力を測定できるばかりでなく，要約では一般化と構成が見られなかった学習者であっても，多肢選択式問題では正答できることが示された。

これまでは産出技能を伴う要約問題によって測定されることの多かった概要把握能力を，受容技能の読解課題における多肢選択式問題で簡便に測定できる可能性を示していることにおいて，本研究は意義がある。さらに本研究を教育に応用するためには，概要把握能力を測定した結果から，学習者が概要把握のどこにつまずいており，どうすればそれを克服できるかというようなフィードバックを提供できるようにしたい。そのためには，各マクロルールを構成するミクロ構造を明らかにする必要があるだろう。佐藤氏も今後の研究として触れているが，マクロルールとミクロルールの捉え直しによって，より精度の高い設問を開発できることが期待できる。

A. 研究部門・報告Ⅱ

竹内　理

日本語を母語とするEFL学習者の暗示的知識の測定：SPRTを用いた実験を通して

【研究者：田中 広宣】

本研究は，日本の「外国語としての英語学習」（EFL）環境において英語を学んだ学習者が習得した文法知識を，従来とは異なる方法で測定しようとする野心的な試みである。そのため田中氏は，明示的な知識の介入を最小限に抑え，暗示的な知識を測定できると考えられている「自己ペース読みタスク」（SPRT）を採用し，CEFR B2～C1という比較的高いレベルの日本人英語学習者を対象として，複数の形態素の習得をターゲットに実験を行っている。

実験は厳密な手順のもと遂行され，適切な統計的手法を用いて分析されている。その結果，EFL環境では，暗示的な知識の習得に至る形態素（進行形，-ing，過去形 -ed，複数形 -s）と，そうでない形態素（三人称単数 -s）が存在している可能性が示唆された。加えて，結果は学習者の英語力レベルの影響を受けていたこと，および母語話者を対象とした他の研究の結果とは異なるものとなっていたこと，なども明らかにされ，それぞれに適切な考察が加えられている。

本研究は，日本のEFL環境に“situated”した状況で行われた研究として，意義深いものと考えられる。また，その結果は，研究の手法面でも，教育的示唆を引き出す基礎研究としても，大いに評価されるべきものと判断される。今後は，田中氏も論文の中で言及しているように，実験の過程で浮かび上がってきた課題を解決した追実験をおこない，結果の信憑性を上げることが望まれる。

田中氏は，真摯な姿勢で研究に臨み，理解したことをもとにじっくりと考え，果敢に実行に移していくという，研究者として大切な資質を備えた気鋭の人材である。今後，ますます精進し，さらに研究を深化していかれることを，講評者は期待してやまない。

A. 研究部門・報告Ⅲ

小泉 利恵

英文要約採点への自動英文解析ツールCRATの利用可能性の検証

【研究者：丹藤 慧也】

現在の学習指導要領では，技能統合型の指導と評価が求められ，読んだ内容を要約する活動では，学習者のライティングをどのように評価するか，模範解答をどのように作成するかなどに頭を悩ませる教員も多いことだろう。丹藤氏は，CRAT（Constructed Response Analysis Tool）というツールを用い，日本人英語学習者の要約を使用語彙の点から検証した。CRATは，既存のツールと異なり，要約に使用する読解テキストに使われた語彙を勘案した上で，学習者のライティングの語彙的洗練度や重複度を算出できる。丹藤氏の研究により，学習者の熟達度や読解テキストの難易度の違いがCRATの値に反映されることが示され，語彙面での要約の評価や，大学生や英語教員の要約改善に向けた情報提供につながる有効な示唆を導いた。

本研究の優れた点の一つはCRATという新しいツールの特徴を，要約評価の点から丁寧に検証したことである。新しいツールが開発され，それを使った論文が出版され始めると，無批判にツールを使い始めることも見られる。しかし，原典をたどり，開発者とやり取りをしても，その値の算出方法やその解釈が不明な場合もある。丹藤氏の研究は，本格的な使用前にツールの有効活用が可能なことを確認したもので，手順や解釈などが他研究でも役立つだろう。

今後は，CRATを使った語彙分析結果を学習者にどのようにフィードバックし，その後の指導で結果を踏まえてどのようにフォローアップすべきか，また語彙以外の観点をどのように評価すべきか（例：ルーブリックを使い，他ツールも併用するか）など，指導と評価に示唆を与える研究を続けてほしい。

B. 実践部門・報告Ⅰ

西垣 知佳子

児童の読み書き能力を成長させるシステマティック・フォニックスの効果検証

【研究者：阿部 友美】

阿部氏は，小学生の読み・書き能力を成長させるためにシステマティック・フォニックスを指導し，その効果を検証した。システマティック・フォニックスは，多様なフォニックスを網羅的に決められた順序で指導する。日本ではその実践例がほとんどなく，阿部氏の研究は新規的で，挑戦的な研究と言えよう。阿部氏の実践が私立小学校で実施されたため，公立小学校では真似できないと思われるかもしれないが，阿部氏の実践には公立小学校の英語の授業にも活用できる示唆が多い。

まず，阿部氏の指導には音素だけでなく，音韻認識が含まれている点である。音韻認識はアルファベットの文字を識別して，発音できるようになるための準備として発達させておく必要があると言われる。阿部氏はこの音韻認識を文字なしでも行なっている。公立小学校でローマ学習が始まり，日本語のモーラが子音と母音に分けられることを児童が意識するのは小学校3年生である。阿部氏の実践が小学3年生を対象としていることから，公立小学校で音韻認識の指導の開始時期を考える上で本研究の結果は参考になるであろう。

また阿部氏が紹介する「カードでスペリング」は音韻認識や音と文字の繋がりの学習に有効であろう。児童はタスク遂行のために注意深く聞き，頭の中ではゲーム感覚で音韻の符号化がなされ，個別学習も協働学習もでき，納得いくまでカードを並べ替えられ，児童の音と文字の関係の理解の様子が可視化されるので教師はそれを見とることができる。カードを使う等すれば，システマティック・フォニックスの全てとは言わないまでも，その一部を使って，毎回の授業で5分ほど継続していくこともできるであろう。

B. 実践部門・報告Ⅱ

小泉 利恵

CLIL授業における Assessment as Learningの効果

【研究者：白井 龍馬】

学習としての評価（assessment as learning: AAL）は，学習者が自己評価や他者評価を通して学びを深める評価形態であり，どの英語学習においても重要である。白井氏は，AALと特に親和性が高いCLIL授業において，AALを形成的評価で活用し，その効果を熟達度と動機づけの点から検証した。教室内研究においてよく見られる，要因の分離や実施の困難性に立ち向かいながら，指導環境の中でAALの特徴と留意点を示したことの意義は大きい。

白井氏の研究には，研究面やCLILの指導と評価の実際など，大いに学ぶ点がある。研究では混合型研究法が用いられた。量的研究においては，テストとアンケートの結果が，事前と事後，そして，AAL実施クラスと未実施クラスで比較されていた。質的研究では，量的分析において代表性が見られた生徒に対し，詳細なインタビューが行われた。全体として意図した効果と予想外の反応が見られ，「質的データと量的データの統合」の節で解釈を深めた。AALの評価では，オンライン上と口頭での自己評価と他者評価，教員コメントを組み合わせた。生徒同士で互いの学習目標と評価を参照できる形がとられ，生徒が自己調整をしながら学ぶ工夫がされていた。

CLILのAALの効果としては，全般的にプラスの方向だったものの，明確な違いの提示には至らなかった。白井氏も述べているように，長期的な効果検証が必要であり，今後も継続してほしい。数年後の言語力や思考力，対人的スキル，動機づけや自己調整力を含め，広く発達を検証していくことで，AALの評価の効果が浮き彫りになると思われる。

B. 実践部門・報告Ⅲ

斉田 智里

中学生（A1-A2レベル）へのturn-takingのストラテジー指導が，生徒間でのやり取りの量と質に与える影響

【研究者：吉崎 理香】

「話すこと（やりとり）」という領域が，学習指導要領外国語科（平成29・30年改訂）で新たに設定された。言語使用場面においては双方向でのコミュニケーションの機会が多いという理由に加えて，言語習得にはやりとり（interaction）の活動が必要であるという考え方が背景にある。しかし中学校の英語授業でやり取りをどのように指導していったらよいか，多くの教員が悩みを抱えている。

吉崎氏は，単なる「発表」の話者交代という現状から，相手を意識した真の「やりとり」に発展させていくために，turn-taking（話者交代）というストラテジーに着目をした。帯活動の中で定型表現として様々なturn-takingストラテジーを指導し，問題解決型のやり取りの活動を生徒間で継続して行う中でストラテジーの使用を促していった結果，中学生の発話内容に変化が見られた。Turn-takingの回数が増加し，1回あたりの発話語数は減少傾向にあるが，全体的に総発話語数が増加していること，使用するturn-takingストラテジーの種類が増え，様々な表現が使えるようになっていること，相手意識の高まりとともにやりとりの内容に深まりがみられてきたことなどを，発話語数ややり取りの回数，ストラテジー使用の頻度や種類といった量的データの分析とともに，会話分析，質問紙，振り返りシートなどによる質的データの分析から明らかにした。

先行研究を丁寧に踏まえた上で，現代的な課題の解決に向けて実践授業を計画・実施し，量的・質的な方法を用いて，やり取りの量や質の変化を丁寧に分析・解釈し，turn-takingのストラテジー指導が，中学生に相手意識をもった豊かなやり取りに効果があることを実証している。非常に優れた実践研究であるので，ぜひ参考にしていただきたい。

B. 実践部門・報告Ⅳ

和泉 伸一

高校生の英語リーディング能力の伸長における協同的なリーディング活動の効果

― 対話による英語読解方略の獲得を通して ―

【研究者：サルバション 有紀】

生徒が読解力をつけるためには，一体どのような指導をしたらいいのであろうか。読解指導といっても様々な方法が考えられるが，一般的には，単語を調べさせて日本語に訳させたり，教師が一文一文解説しながら読み進めたり，問題演習と称して読解問題を多く解かせたり，あるいはこれらのコンビネーションであったりすることがまだまだ多いのではないだろうか。こういった指導一辺倒のやり方やテスト調の教え方以外に，もっと生徒のやる気を喚起して，思考を刺激できるような教え方はないのだろうか。

リーディングはもとより生徒自身の頭の中で起こることなので，中の見えない“ブラックボックス”のようなものだが，それを少しでも可視化して共有することはできないのだろうか。サルバション氏の研究では，この問題の解決策を「協同的な英語リーディング活動」の手法に見出し，その試みがどこまで生徒の学びにつながるかについて検証している。生徒同士の話し合いを通じて，お互いの使っている読解方略を共有し，学び合いを推進しようとする画期的な試みである。

言葉の学びは「長い旅路」であり，ゆえにそれは教室外でも，学校を卒業してからも長く続くべきことである。その意味で，リーディング指導の（あるいは英語教育全般の）究極の目的は，ただ知識を与えることではなく，“自律した学習者”を育てることにあると言えよう。この目的に照らして考えると，学びの共有とそこから学び取る自発的学習の重要性はより一層明らかになってくるのではないだろうか。今後は，協同的学習と教師の指導・支援をどう織り交ぜていけるかといったことも探っていく必要があるだろう。

C. 調査部門・報告Ⅰ

寺内　一

動機づけ方略に関する英語教員と英語学習者の認識の考察

【研究者：川光 大介】

本研究は，「動機づけ方略（Motivational Strategies: MS）」の効果に関する認識において，教員と学生間に差があるかを調査している。工業高等専門学校の学生316名と英語教員6名を対象に質問紙調査を実施することにより，MSの効果についての認識は学生と教員間で非常に似ており，「達成感を得られやすい授業を展開すること」の平均値が高いことを明らかにした。そして，この結果は，英語習熟度と英語学習への動機づけの強さが異なる学生クラスター間でも差がないことを示した。本研究は，MSに関する専門研究を幅広く整理し，研究課題の設定から質問紙の作成，および統計的な分析まで，関連する研究を踏まえて実施しているところが高く評価できる。

川光氏は，教員の認識が授業実践には反映されない場合もあることを踏まえて，今後の研究としてインタビューや授業観察の必要性を述べている。このような発展的な研究の際には，下記の点に留意してほしい。本研究の学生対象の質問紙では各MSに対して「授業中に先生が取り入れてくれたら自分のやる気が高まるか」どうかを尋ねている。この場合，暗に「現在，先生は取り入れていないけれども」ということを前提として回答する学生がいた可能性がある。すなわち，動機づけに効果が期待されるMSでありながら，すでに先生が実施しているものは平均値が低くなったかもしれない。この点にも注意して，本研究で平均値に差があったMSについても，授業ではどのように使用されているかを検証してほしい。